

おおのまーおおはし

したが挫折。「中外商業新報」などに勤務。昭和6年(1931)「ささがに」に入会、9年「短歌至上主義」の同人となる。19年「光」に所属、浦和市に陣開。同21年常見千香夫・加藤克巳らと「鶴苑」を創刊。22年新歌人集団に参加、同年、歌集『薔薇祭』を出版。虚構をはらんだ唯美的な志向を見せた。近藤芳美・中野菊夫・宮格二・山本友一と合同歌集『新選五人』を刊行。戦後短歌を代表する歌人となった。「鶴苑」廃刊後、28年「砂廊」を創刊、35年に「作風」と改称。57年エッセイ集『或る無頼派の告白』を刊行、孤立した奔放な歌人であった。

おおの まんすい 大野 満穂

文化11—明治25.10.17(1814-1892)
幕末・維新期大野原村(秩父市)の医師。
号を玄鶴、また惜古文室主人。天保8年
(1837)から明治20年(87)まで約50年
かけて、秩父一郡の地誌資料を集め
た「秩父志」の著作がある。長く未刊のま
まだったが、『埼玉叢書』第1巻に収載
された。

おおの もとよし 大野 元美

大正1.11.17—昭和57.4.19(1912-1982)
川口市長・実業家。川口町(川口市)生
まれ。昭和8年(1933)明治大学商科卒
業。大野電機鑄造所社長の傍ら、県水泳
連盟会長、県教育委員、川口市議などの
公職を歴任。32年川口市長に当選、56年
まで通算6期務める。この間同47年県知
事選に自民党から立候補したが、畠和に
破れた。市政では「住み・働き・楽し
む」をスローガンに産業公害の防止に務

188

めたほか、10割給付の国民健康保険条例、
全国初の交通災害共済条例、国に先だつ
て中小企業退職金積立組合の創設した。
また教育面でも全校にプール、全地区に
公民館を建設、県下初の言語障害・難聴
児童学級を設けた。46年藍綬褒章受章、
享年69歳。同市名誉市民。

おおの ろくいちろう 大野 緑一郎

明治20.10.1—昭和60.9.2(1887-1985)
内務官僚・貴族院議員。六辻村(浦和
市)生まれ。農業大野安之助の4男。浦
和中学、第一高等学校を経て、明治45年
(1912)東京帝国大学法科大学独法科を
卒業後、文官高等試験に合格して内務官
僚の道を歩んだ。秋田県属、香川県理事
官、内務書記官、社会局書記官を務め、
大正12年(23)欧米出張、帰國後社会局
社会部長、15年徳島県知事、昭和2年
(27)岐阜県知事、内務省地方局長など
を歴任した。5年にはスイスにおける第
15回国際労働総会に政府代表委員として
出席した。7年警視総監に就任、5・15
事件の責を負い辞職したが、同10年関東
局総長となった。翌11年朝鮮総督府政務
総監に就いたが同17年に辞職、この年貴
族院議員に選出された。敗戦後の公職追
放後は弁護士を開業した。享年97歳。

おおはし ほうちょう 大橋 方長

生没年不詳
江戸時代の文人。通称八右衛門。安永一
寛政期(1772-1801)頃の人物。90数部の
典籍を抜粋した事文類聚型の地誌「武藏
演路」の編さん者として有名。写本で流
布し多く利用されたが、埼玉・幡羅など

北部6郡は含まれな
古図説」も未刊、写

おおはた きさん

嘉永6.12.6-明治
蚕糸改良家。賀美郡
まれ。早くから農蚕
林を開墾して桑園の
12年(1879)には同
場を村に設置し、近
糸を練習させ、捻造
かし、原料繭が良く
蚕種の精製を図り、
た。同13年児玉製糸
横浜に出張して生糸
14年に県下生糸改正
15年には社長に推さ
移して生糸の改良、
本社製出生糸の海外
同年養蚕改良組合を
自費で精選蚕種を購
さらに保益会社を設
糸製造家への薄利融
は有志と団り、共進
社長となり、折衷育
農學講習所を開き、
集して理論と実習を
8反歩に桑苗・米・
培、良質多産の農產
産を取り入れた。以
の卒業生男女約800名
検査員・養蚕教師と
さらに同年村内にあ
立して農蚕の改良を
共進会等への出品を
児玉賀美那珂改良組